

偶然的真理としての〈 物理主義・エピフェノメナリズム〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード: 作成者: 柴田, 正良, Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43217

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



偶然的真理としての〈物理主義・ エピフェノメナリズム〉

名古屋大学哲学会第31回大会
於：名古屋大学

金沢大学教育担当理事(副学長)

柴田正良 Apr.11, 2015

話の流れ

1. 因果的閉包性 (causal closure) と過剰決定
2. 心的性質に真の因果的効力はない。仮にあっても、基盤性質から逸脱した独自の因果的効力は持てない
3. エピフェノメナリズムと創作される道徳・倫理
4. 偶然的真理としての物理主義



物理的世界における因果的閉包性

- いかなる物理的出来事にも、それを引き起こすのに十分な原因としての物理的出来事が存在する。
- どんな物理的出来事の原因の連鎖をどれほど遡っても、この物理的世界を飛び出すことはない。



自由意志による行為の過剰決定

もし行為が先立つ物理的原因(脳内の出来事)ではなく、物理的でない他の原因によって引き起こされることが、自由な行為にとって必要であるなら、



自由な行為は、常に、それを引き起こすのに十分な2つの原因を持つことになる。

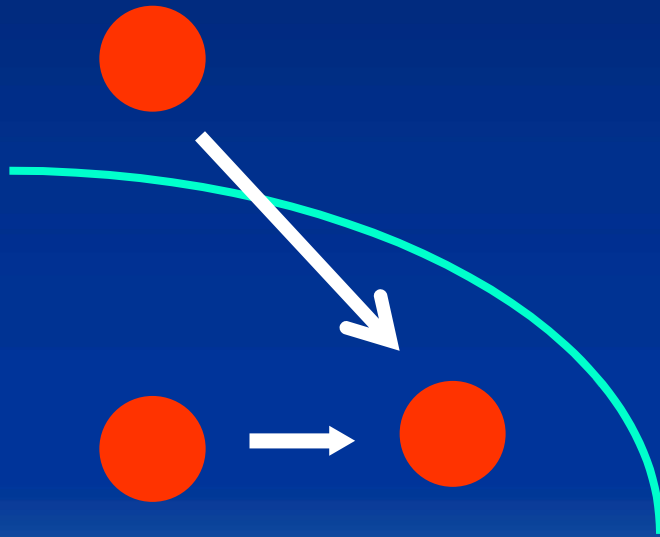
過剰決定(overdetermination)

脳状態にスーパーヴィーンする心的性質としての意志

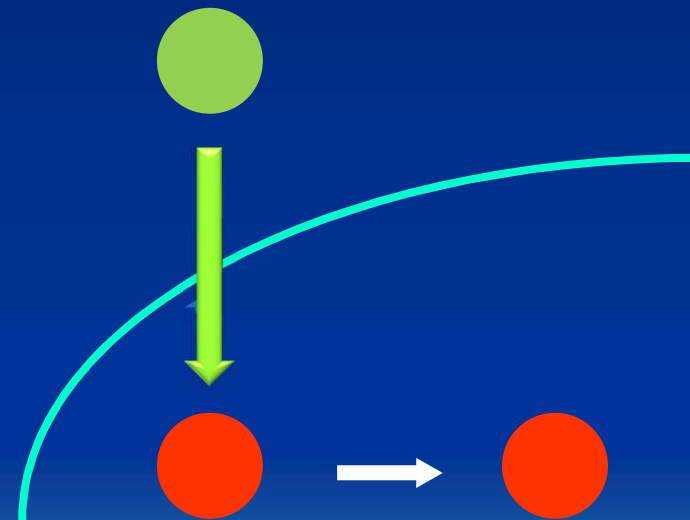
1. 意志の出現は脳状態の変化と、出来事としては同一であり、性質としては異なる。
2. 因果関係としては「意志→行為」は、「脳状態→身体状態」、という物理的因果関係としてしか存在しない。
3. 性質間の関係としては、脳状態の性質に意志内容といった心的性質がスーパーヴィーンする。

因果関係とSV

因果関係(出来事)



SV関係(性質)



過剰
決定

意志の生起もまた物理的出来事

意志の生起に因果的な非決定がたとえあるとしても、それが意志にいかなる
〈自由〉を与えるのか？

因果的な非決定性(ランダム性)が大きければそれだけ、意志の来歴は理解不可能になる(誰が、なぜそれを意志するのか？)。

スーパーヴィーニエンス (SV)

- スーパーヴィーニエンス (SV)とは性質間の連動関係、もしくは連動的な依存関係のことである。
- (非還元的)物理主義の主張・・・心的性質は物理的性質にSVする。
- 身体物体の完全なコピーは意識／心の完全なコピーだ (SVの主張)

2. ローカルなSVとグローバルなSV

ローカルなSV関係

〈千円札に見える〉という性質は、ある紙切れの色や形といった性質にローカルにSVする。

グローバルなSV関係

〈千円札である〉という性質は、上の性質にローカルにはSVしない。偽札のこと。

しかし、〈千円札である〉も、因果的歴史を含めたある範囲の物理的世界にグローバルにSVする。

本物は造幣局における過去の印刷を含めた物理的世界にSVする



本物

偽物

何が脳へローカルにSVするか？

- 概念化・言語化される以前の、自然現象として発生する心的現象・・・〈意識〉、〈クオリア〉〈感情〉、〈欲求〉、〈信念〉・・・
- しかし、心的な諸概念、例えば素朴心理学によって帰属される心的状態（感情、欲求、信念など）は、脳にローカルにはSVしないだろう。



心的性質と因果的効力

(因果的閉包性の故に)

- 1. 脳にローカルにSVしない心的状態は、因果的効力を持たない。
- 2. 脳にローカルにSVする心的状態であっても、それは基盤性質である脳状態の因果的効力を逸脱した、独自の因果的パワーを持つわけではない。
- 3. 仮に心的性質と物理的性質が同一であっても、心的性質は「心的性質として qua mental properties」因果的効力を持つのではない。

物理的世界における心的性質

1. 心的現象(クオリア、意識など)は、因果的閉包性により、**物理的現象の原因であれば過剰決定**をもたらす。そうでないなら、心的性質としては、因果的効力を持たない。
2. しかし、それらは**物理的現象に依存して生じる**
← まったくデタラメな、理解不可能な仕方で生じるのではない。**法則的ちょうちん**(nomological danglers・・・ファイグル)。それゆえ、**エピフェノメナリズム**が妥当な帰結となる。

エピフェノメナリズム恐怖症 epiphobia

- 自分たちの意図的行為のすべてが、自分たちの知らない物理過程の〈影〉にすぎない、ということへの恐れ。
- もしエピフェノメナリズムが真なら、“it’s the end of the world！”(J. フォーダー)
- われわれの行為は、走行する自動車が作り出す、自動車の影のようなものか？(J. キム)
- しかし、それは情緒的な問題にすぎない。

エピフェノメナリズムで何が悪いか

自由意志なき世界における責任

- すべての出来事が法則的に決定された世界において、われわれはそもそも責任を問えるのか？
- 事物・・・動物・・・人間・・・(すべてに責任を問うてもよいのだが)
 1. 応報・報復が意味をなす存在者としてのわれわれ人間・・・差し替え可能な存在論的立場(応報主義)
 2. 将来の類似状況に対する警告が意味をなす存在者としてのわれわれ人間(帰結主義)

責任帰属の根拠としての合理性

- われわれは、行為に対してのみ責任を問う。
- 身体運動は、欲求と信念によってその理由が合理的に再構成されうるものが、そしてそれのみが行為である。



- 信念・欲求・行為の持つ合理性が、責任帰属の根拠である。

責任(道徳)の自然化は可能か？

- 合理性によって制約されている行為に関する諸概念、心的諸概念、たとえば「友愛の精神」などが脳状態にローカルにSVするなら、
- 合理性概念が自然的性質にSVするなら、



- 責任は「きれいに」自然化される。
- 倫理もまた自然科学の一つになるだろう。

責任のきれいな自然化は不可能

責任を脳神経科学が完全に解明・説明することはできない ← 責任は脳の神経活動にローカルにSVしない

責任概念どころか、行為の概念、ひいては道徳・倫理の諸概念はすべて、きれいな自然化が不可能であろう。

それらの概念が、自然科学的には「いい加減」だからだ。

責任の自然化を阻む要素

- 1. 心的内容の外在性(パトナム、他)
- 2. 心の非法則性(ディヴィドソン)
- 3. 消去主義的唯物論(チャーチランド、他)
- 4. コネクショニズム(スティッチ、他)
- 5. 道具主義(デネット)

合理性は因果性の中に対応物を持たない




連続性テーゼ

1. 脳の異常や障害による行為と、いわゆる普通の行為は、連続的である。

心神喪失・心神耗弱 → 因果的責任

2. 責任を行為の合理性によって決定するのは限界がある。← 合理性は自然化できないし、行為の合理性には程度がある。

法的責任の設定

- 連続性テーゼ 
- 人体の運動が、事物としてある結果を引き起こすケース(責任がほぼ0%)
- 行為理由にしたがって、行為者が合理的な行為によってある結果を引き起こすケース(責任がほぼ100%)
- その中間のさまざまなケース($0 < X < 100$)

恣意性テーゼ

- 道徳・倫理の究極の正当化は(1)何らかの原理によってアプリアリになされるか、(2)自然化によってなされるか、しかないだろう。
- しかし、どちらの方策も望みなき試みである。
- われわれは、究極の正当化を欠いた、道徳・倫理の〈絶対的選択〉に直面している。



道徳的・倫理的責任の創作

何が倫理的に<悪>であり<善>であるかは、自然化できない。道徳・倫理は物理的世界にSVしない。それらに関する思考・信念がたとえ脳にSVするとしても。

どのような倫理・道徳も、われわれは**幻想の制度**として選ぶ。

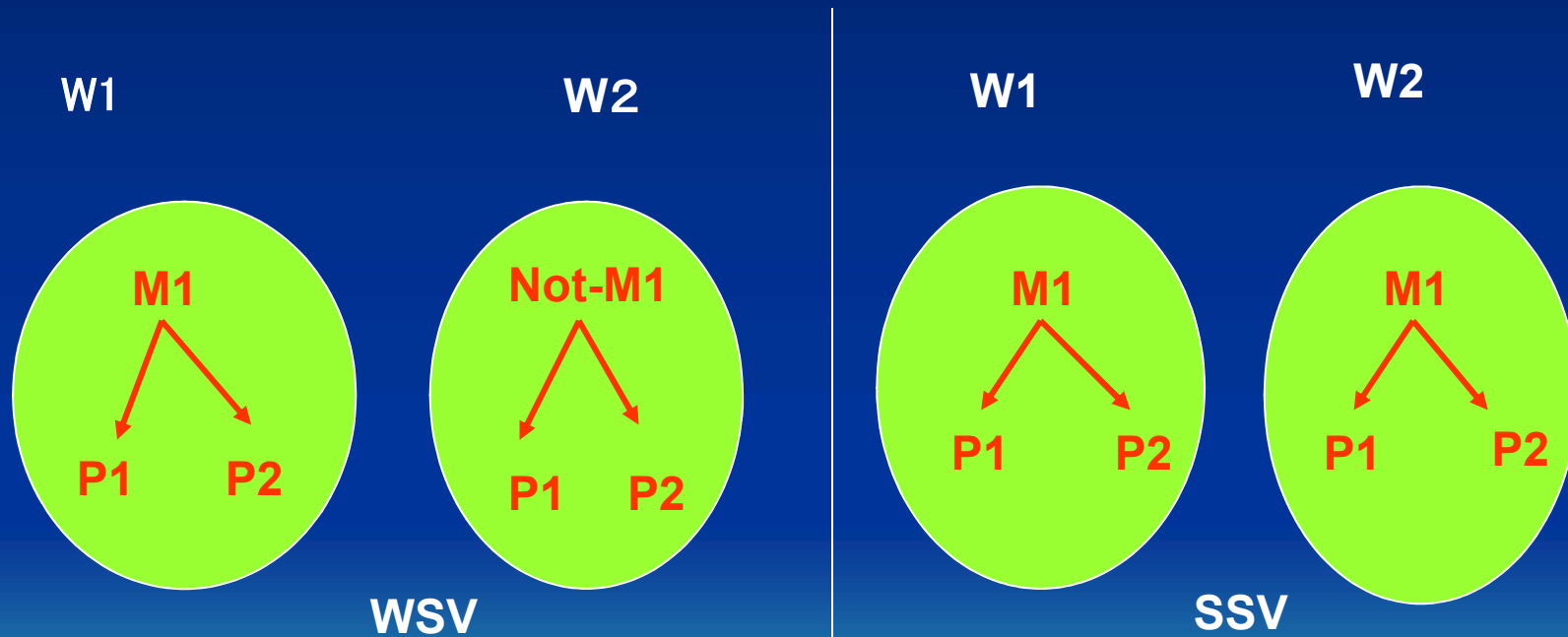


政治哲学的意味での自由主義

- 古典的(形而上学的)な意味での自由意志の概念は、はっきりと放擲すべきである。
- 他者危害原則を侵さないいかなる行為も道徳的に許される、とする自由至上主義(出発点の大枠として)
- 他者危害原則以外の考慮は、われわれの<他人と付き合う仕方>の文化・趣味である。

<弱いSV>と<強いSV> 再びSV

SVの強さは、必然性の度合いを表す



SVの成り立つ可能世界の範囲

- <弱いSV>と<強いSV>の違い →
スーパーヴィーニエンス関係(例えば、C繊維の興奮と痛みの感覚)がある可能世界内部で成立すればいいのか、それとも任意の可能世界相互にまたがって成立するのか、という違い。



- 物理主義は、<弱いSV>の主張では意味がない

<ほど良く強いSV>

- しかし、<弱いSV>よりも強く、<強いSV>よりは弱いSVが存在するだろう。そして、これこそがわれわれの主張だ。
- それは、ある可能世界でのみ成立する(偶然性)のでもなく、あらゆる可能世界で成立する(無条件の必然性)のでもない。
- われわれの自然法則がそうであるように、それはある範囲の可能世界群で成立する関係(弱い必然性)だ。… 偶然的真理としての物理主義。
- SVが真に根源的關係なら、そのSVがなぜしかじかの範囲の可能世界で成立するのかについての、還元的説明は存在しない。

性質二元論的物理主義 (現実世界という可能世界)

- 偶然的真理としての物理主義

→ あらゆる可能世界から成る論理空間の中を、次のような可能世界群が棲み分けている。

(A) 実体一元論と性質一元論が成り立つ可能世界群。例えば、それは、物理的な個体と物理的な性質のみが存在する可能世界群である。

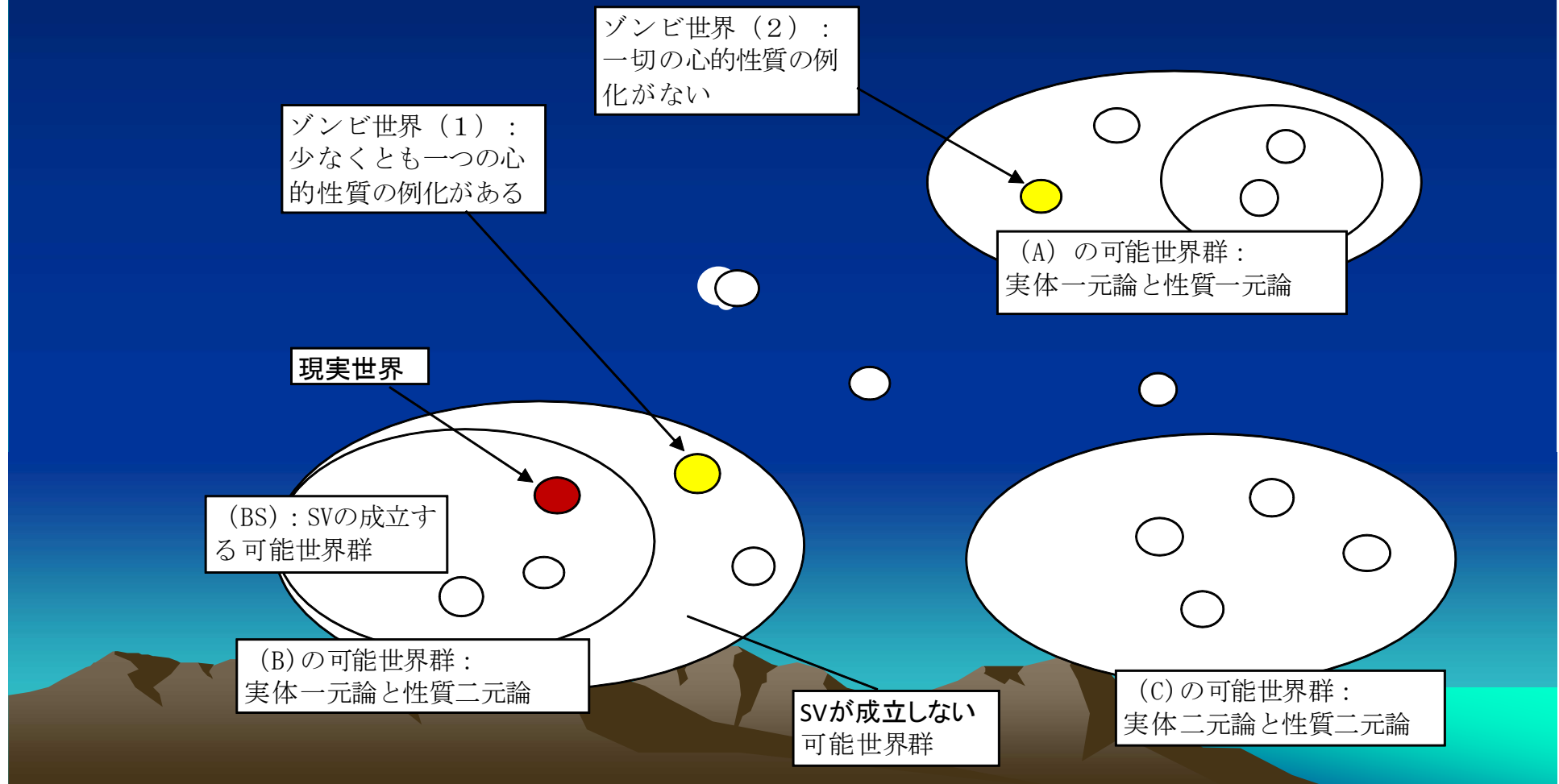
性質二元論的物理主義(2)

- (B)実体一元論と性質二元論が成り立つ可能世界群。それらの世界では、例えば、いかなる心的個体も物理的個体と同一だが、いかなる心的性質も自然な物理的性質と同一ではない。
- (C)実体二元論と性質二元論が成り立つ可能世界群。これら世界では、例えば霊的実体がいかなる物理的個体とも同一ではないものとして存在し、かつ、いかなる心的性質も自然な物理的性質と同一ではない。

性質二元論的物理主義(3)

- (B)の可能世界群の内部には、さらに、心的性質が物理的性質にスーパーヴィーンする**可能世界群(BS)**と、そのスーパーヴィーニエンスが成り立たない可能世界群(B-BS)を区別することができる。
- 私が提案している性質二元論的物理主義→現実世界はこの(BS)の可能世界群に属する

性質二元論的物理主義から見た現実世界の位置



で、哲学は何を明らかにするのか？

- 哲学的考察は、すべての科学の真理と、すべての常識を最大限整合的に説明する道を探る。
- 哲学は、現実世界がいかなる可能世界であるか、についてのもっとも合理的な説明をわれわれに提供しようとする。



おしまい

柴田の研究関連webサイト

<http://siva.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

